

「誰も寝てはならぬ」

偏向番組に首相が出演！

この9月6日、驚くべきことが起きた。安倍総理がインターネット放送『真相深入り！虎ノ門ニュース』に出演したのだ。翌7日は自民党総裁選の告示日だったので、石破茂元幹事長との一騎打ちを控え、視聴者に自己アピールを行なおうとしたのだろう。

もちろん、それだけならとくに「驚くべきこと」とは言えない。問題は、その番組の内容である。そのときどきの社会問題について曜日ごとにコメンテーターが行なうスタイルのこの番組だが、出演するのは参議院議員の青山繁晴氏、小説家の百田尚樹氏、ケント・ギルバート氏、竹田恒泰氏、上念司氏など、いわゆる熱烈的な「安倍応援団」の言論人ばかり。彼らの野党議員の国会答弁や中国、韓国情勢への批判には、時としてデマや差別煽動的な発言、いわゆるヘイトスピーチも混じっており、しばしばネット上などで問題になっている。しかし、ネット放送は民放連の放送倫理基準の縛りからはずれているため、野放し状態のままなのだ。

番組を制作しているのは、DHCテレビと

香山リカ



いう制作会社であり、あの化粧品品のDHCの完全子会社である。この制作会社は『ニュース女子』という番組も作っており、そちらは一部の地上波局でも放映されているが、「沖縄の新基地建設反対運動の参加者は日当をもらっている」といったデマを流した回にBPO（放送倫理・番組向上機構）が放送倫理違反という裁定を下した。また同番組をめぐってDHCと当時の司会者の長谷川幸三・元東京新聞論説副主幹は、放送内で「反対運動に資金を提供する」黒幕などと一方的に決めつけられた辛淑玉さんから名誉棄損で提訴され、現在係争中である。

つまり、『虎ノ門ニュース』やそれを制作しているDHCテレビとは、ヘイトデマを垂れ流してきたいわくつきの制作会社を作る極右番組——以下ではあえて「ネットウヨ番組」という表現を使いたい——と言ってもよいだろう。

首相の関心の先に国民は不在？

同番組にはこの6月に芸能人のつるの剛士氏が出演し、そのときも「お茶の間の人気者がネットウヨ番組に出るなんて」と物議をかもした。つるの氏は出演の際、同番組をよく見

ていると言い、「日本を愛する人の足を引っ張らないでほしい」などと自身の愛国心をアピールするような発言をした。

そのような芸能人でさえ出演が問題になるような番組に、現役の総理大臣が出演するというのだ。もし、安倍総理がまったく逆の方針を持つリベラル色の強いネット番組にも出演するのであれば、「多様な番組に出ているいろんな視聴者に訴えたい」という説明も可能だが、もちろんそうではない。総理は、自分の支持者の多くは極右的主張どころかヘイトデマまでも喜んで信じるような、いわゆるネットウヨであることをよく知っているのだろう。そして、「偏向しすぎている」といった批判も逆風にはつながらず、と聞き直っているようにも見える。

『虎ノ門ニュース』はネットの生放送だが、総理の出演は官邸で収録されたインタビューという形で行なわれた。しかし、そこにも問題があった。収録が行なわれた9月3日は、西日本に非常に強い勢力を持った台風21号が近づきつつある日だった。その後、台風は実際に関西を中心に大きな被害をもたらしたが、収録は多くの住民が不安の中で避難などの準備をしている時に実施されたのだ。

そして、生放送の9月6日の未明には、北海道胆振東部地震が発生した。放送は朝8時からであるが、北海道は全域が停電に陥り、震源近くで発生した大規模な土砂崩れなどの被害が刻一刻と明らかになりつつある時であっ



た。

インタビュー
動画で登場した総理は、満面の笑みで番組の司会者たちを官邸の応接室に招き入れ、「番組を密かに見ている」「非常に濃い（内容）など」と絶賛し、とても上機嫌

そうじゃなかったとしたら、出演くらいは仕方ないんじゃないか」などと、さほど大事件だとは思わないのではないかと。私たちの感覚はすっかりマヒしているのである。

実は、この「感覚をマヒさせる」というのが、安倍政権が行なっている最も巧妙な国民操作法なのではないかと思うのだ。たとえば麻生外相はこの間、目に余るほどの失言、暴言を繰り返しているが、あまりにその数が多いので、かえって私たちは「ああ、またか」「あれ、それって前のことじゃなかった？」などと感覚にマヒが起きて、いちいち驚いたり怒ったりすることができなくなっている。

問題は、正常時の中で突発的に起きるから「問題」なのだ。問題がインフレ化している中では、それはもはや「問題」ではない。このような私たちのなれの心理的メカニズムを逆手にとって政権運営が行なわれたことは、これまでなかったように思う。だからこそ安倍政権では、杉田水脈議員のLGBT差別発言や片山さつき大臣の政治資金疑惑など問題が起されば起きるほど、むしろウエルカムなのである。「ああ、またか」と国民のなれによるマヒがさらに進むからである。

このなれによるマヒ、つまり馴化（編注・刺激が繰り返されることで、刺激に対する反応が徐々に見られなくなる心理現象）のメカニズムと抗うのはたいへんなことだ。なれが起きないように、ひとつひとつのことに初めて接したような気持ちとなり、そのつどショックを受けたり腹

を立てたりしなければならぬからだ。それは感じる方の心も疲弊させ、ストレスもためる。「ああ、またか」とやりすぎず方がずっとラクなのである。

とはいえ、「総理がネットウヨ番組に？ それくらいやるだろう」「大臣が韓国にヘイトスピーチ的な発言？ 前にもそんなこと、なかったっけ？」などとすべてを受け流しては、国民はハッと気がついたときには排外主義的な全体主義の従順な一員、ということになりかねない。

強い意思が必要ではあるが、常に神経を研ぎすませておくこと。「ああ、またか」と思うのはやめ、あらゆる不祥事や問題を「はじめのこと」と受け止めること。私たちにいま、必要とされているのはこのような荒行、難行である。ただ、これはちよつとした心がけで誰にでもできることでもある。私自身はときどき、ブッチーニのオペラ『トゥーランドット』の名アリア「誰も寝てはならぬ」を聴いて、自分にもそう言い聞かせる。私のおすすめは、なんとといってもバヴァロッティ版だ。あの明るく澄んだ声で「誰も寝てはならぬ／貴方もですよ、姫様／寒い部屋で星を見上げ／愛と希望に打ち震えながら」と歌われると、そのつどハッと目が覚める思いがするのである。

国民を操縦する首相の秘策とは？

だった。その後は司会者からアベノミクスの成果や「地球儀を俯瞰する外交」などを手放してほめられ、それを自ら解説するという構成であったが、「外国人労働者の受け入れ政策」の話題になると、「移民政策は取らない」「一定期間、能力を発揮してもらおう（だけ）」など決して外国人の定住を促すものではないことをやや強めの口調で主張した。もちろん、森友・加計学園問題など批判的な話はいっさい出なかった。

どうだろう。こういう話を聞いても、多くの人は「ネットウヨ的な番組に安倍総理が出演したって？ まあ、そういうことをしそうだな。そこでトンデモない問題発言をしたの？

（かやま・りか／精神科医・立教大学現代心理学部映像身体学科教授）